

# お米作りから広がる子どもの世界

この実践は、「5歳児の米作りに関する一年間の活動に注目し、長期にわたる活動をやり遂げることで、子どもたちの『科学する心』の育ちにつながる体験を明らかにした事例」です。米作りは、子どもの主体性を生かした保育者の援助や環境構成の工夫により、多様で豊かな体験に広がっていきました。これらの多様な活動に、地域の施設や専門家、保護者などとの連携が大きな支えとなり、米作りに関する活動の深まりとともに、様々な探究の広がりへと、ダイナミックに発展したことが伝わってきます。

## 学校法人山梨学院 山梨学院幼稚園

5歳児



**<米作りのきっかけ>** 5月、Aさんが家から持ってきてくれたお米の赤ちゃんに、子どもたちは興味津々。そして、バケツによる米作りを知ると、「やりたい！やりたい！」と大盛り上がり。米栽培の経験も知識もない保育者たちは、不安もあったが、子どもたちの意欲に圧倒され、実施することにした。また、地域の博物館にみんなでいった際に、職員のN氏が、火起こしの方法や石包丁の作り方、土器・土偶、竪穴住居のことなど、様々なことを教えてくださった。そこで、古代米とも出会い、興味をもった。

### 場面1. 念願の田植え

<6月中旬>

- ・いよいよ田植え当日。保育者が5本程度の苗の束を一人ずつに渡していった。
- Aさん：「ウワッ。土が軟らかいから立たないかも」
- Bさん：「大丈夫だよ。下の方にギュッと入れると、立つよ」
- Cさん：「奥まで入れないと倒れるね」
- Dさん：「苗（の束）と苗（の束）は離さないとダメだって」
- Aさん：「くっ付いているとぶつかっちゃうもんね」
- ・2日後、博物館から届いた古代米の苗を植えた。
- Eさん：「ねえ、古代米の下（根の元）に黒いお米が付いてる！」
- 子どもたち：「見せて、見せて」「本当だあ」「こういう色のお米がなるのかなあ？」
- Cさん：「（古代米の方が）葉っぱの色も少し濃いね」
- Fさん：「（コシヒカリの）バケツの水、前より減っている」「土が乾かないように水をあげなさい」



下の方を持って植えるんだよね



黒いお米だ

### 場面2. 友達のパケツ稲との比較・コシヒカリと古代米の比較

<8月初旬～9月初旬>

- ・夏休み中は、保護者にご協力いただくためにも、保育者は、稲の育て方をさらに調べた。8月の中旬から花が咲きだし、「穂が出てからすぐに咲き、限られた時間しか咲かない」という貴重な花であることを手紙でご家庭に伝えた。また、夏休み中、こうした稲の変化に気づいてほしいという保育者の願いもあり、家庭で観察画を描いてもらうことにした。
- ・夏休み明け、「稲の花、見られたよ」「大きくなったよ」と嬉しそうに報告し合う子どもたち。自分の稲と友達のを熱心に見比べる姿が多く見られた。また、休み中、幼稚園で保育者が育てていた古代米とコシヒカリとを6週間ぶりに見て観察し、穂が伸び、色の変化、葉の感触などを伝え合う子どもたちの姿も見られた。
- Cさん：「（古代米のモミ（つぶ）を観察）触った感じ、空っぽだよ」
- Gさん：「モミが白っぽいと中が空っぽのことが多いね」
- 保育者：「コシヒカリと古代米の稲って、どこが違うかな？」
- Fさん：「古代米の方が、葉っぱの色が濃い！」
- Bさん：「古代米の方が、モミの中がうっすら黒い」
- Cさん：「古代米の穂のほうが、手に刺さるような鋭い感じがする」
- Gさん：「コシヒカリの穂の色は、黄色っぽくなった」
- Gさん：「穂の音がカサカサ聞こえる」



Hさんの苗の記録「穂を発見」



モミが白いと中は空っぽ

### 場面 3. 稲刈り・脱穀

< 9月中旬 >

- ・ ついに、稲刈りの日。石包丁（手作り）を使って稲の穂の部分を取り取ろうとしたがうまくいかず、結局、根元を持ちながら、はさみで切ることにした。  
**古代米は茎の中が紫色になっていることを発見！その後、稲を乾燥させる。**
  - ・ 一週間後、せっかく作った石包丁をどうしても使いたい子どもたちは、石包丁で稲穂から粃をそぎ落そうと試してみた。
- Aさん：「ぜんぜん上手にできない」 Bさん：「なかなか取れないね」  
Gさん：「手で取ったほうが早く取れる！」 子どもたち：「本当だ！手のほうがいい」  
しばらく手作業で脱穀が進むものの、終わりの見えない稲穂の量に…  
・ 疲れた様子だったが、「でも一粒残らず集めたい！」と、繰り返していた。  
保育者：「昔の人たちは、大変な思いをしてお米を食べていたんだね」  
Cさん：「お米を作るって、大変だね」  
Gさん：「でも、こんなに時間がかかっているから、たくさんのごはんが食べられそう」  
子どもたち：「楽しみ！」  
その後も、何日もかけて手作業で脱穀をしていった。



古代米の茎の中は紫色



手で取った方が早い！

### 場面 4. 竪穴住居を作りたい

< 10月下旬 >

- ・ 稲刈りをした際に余った藁を見た子どもたちが、博物館の竪穴住居の屋根が藁でできていたことを思い出し、「竪穴住居を藁で作りたい！」と言い出した。竪穴住居の写真や資料を見ながら、「たくさん柱があるね」「柱は何で作ろうか」と相談する。本物の竪穴住居のように、「木は集められないから」と、新聞紙を丸めて木の代わりにすることをBさんが提案した。ところが、新聞紙の棒を縦につなげて高さのある住居にしようとする、骨組みがすぐに折れてしまう。保育者が原因を尋ねると…。
- Gさん：「2本までは折れないんだけど…」  
Bさん：「新聞紙が細いから折れちゃうんじゃない？」  
Cさん：「新聞紙の棒を太くするために、重ねて丸めたほうが良いのかも！」  
Eさん：「新聞紙は紙だから弱いもんね。重ねてみよう」  
・ 子どもたちは、「失敗は成功のもと！」と言いながら、再チャレンジする。新聞紙を7～8枚ほど重ね、丸め始める。新聞紙を丸める子ども、丸めた新聞紙の棒をガムテープでつなぎ合わせる子どもなど、役割分担をしながら作る姿も見られる。しかし、新聞紙の棒を2本以上縦につなげると、また折れてしまう。すると、Rさんが、「折れちゃう所は、つないでいる所だ！」と発見する。  
Cさん：「(トイレトペーパーの芯) これを (つなぎ目に) かぶせたらどうかな」  
Bさん：「トイレトペーパーの芯は硬いから、丈夫になるかも」  
子どもたち：「これいいねー。折れなくなった！」  
・ その後も、日々コツコツと竪穴住居作りを続け、やっとなんか骨組みが完成する。  
**子どもたちからのアイデアで、竪穴住居の壁には新聞紙を貼り、その上から収穫した米の藁をかぶせる。**約1ヶ月半後に、竪穴住居が遂に完成する。



繋ぎ目が折れやすいね



細くて折れちゃうね



三角形にしてみよう！

**【考察】** 子どもたちが、自分の興味・関心や得意なこと、好きなことを「入口」にして、米栽培に興味・関心をもつようになっていったことから、体験は広がり深まっていった。

**場面 1.** B児は、自分の体験から得た感触を友達に伝えアドバイスしていた。古代米の苗では、根元に付いている米の色の違いに気づき、葉の色の違いにも興味を示した。子どもたちの観察力の育ちを感じた。

**場面 2.** 子どもたちは、自分と友達の稲の違いを熱心に見比べ、発見を伝え合い、生長を喜び合った。見比べることの楽しさは、古代米とコシヒカリの稲の様々な違いにも気づききっかけになり、新しい発見を生み出した。また、夏休みの間、バケツ稲を家庭で育て、観察することで、子どもたちは“自分のバケツ稲”の成長を身近に感じ、より大切にしようとの気持ちが育まれたのではないだろうか。

**場面 3.** 折角、石包丁を作ったのに、その失敗の体験を深められなかったことは悔やまれる。ほとんどの子どもたちは、手で脱穀する方が早く取れる感覚を掴んだようである。脱穀は、予想していたよりも遥かに時間がかかったが、育てたお米の尊さを感じている様子が窺えた。

**場面 4.** 古代米をきっかけに、「古代」への興味や関心も強まり、遊びが広がった。竪穴住居はどうしたら建つのかなど、試行錯誤する過程で協力的な遊びを展開していく姿に、5歳児らしい探究意欲を感じた。